

## 御会式参加組織の運営実態から見る住民ネットワークの考察

Consideration of the inhabitants network judging from the administration actual situation of Oeshiki participation organization

11423011 三浦茜

薬袋奈美子准教授

定行まり子教授 是澤紀子准教授

地域祭礼 組織運営 地域コミュニティ 地域交流 雑司ヶ谷

Community Festival Organization Management Local Community Region Exchange Zoshigaya

## 1. はじめに

## 1.1. 研究の背景と目的

戦後、農村を離れ都市部への人口流入と経済成長を進めた社会は人々を地域から孤立させた。社会の成熟を迎えた今、かつて農村社会のような共同体としての地域の繋がりを「地域コミュニティ」とし、再興を呼びかけている。この動きは東日本大震災以降さらに高まっているが、実状として地域組織や活動の担い手がおらず多くの地域での課題として取り上げられている。一方、被災地では地域の祭りの復活から地域の繋がりをつくるといった例もあるように、祭りはその運営や参加を通して地域の人と顔馴染みになり普段の生活へと繋がりが展開される、地域の繋がりをつくる重要な要因となると考えられる。

本研究では、地域の祭りの運営・参加が住民と地域との繋がりに与える影響について、豊島区雑司ヶ谷鬼子母神堂（法明寺）の「御会式」への参加組織の運営実態と生活行為の展開から明らかにし、今後の地域運営への展望を得ること目的とした地域運営研究とする。

## 1.2. コミュニティの概念

## 1.2.1. 都市社会学におけるコミュニティの概念

これまで、「コミュニティ」という概念は、様々な解釈がされている。アメリカの社会学者であり哲学者でもあったマッキーヴァー<sup>1</sup>はコミュニティの定義について「コミュニティという語を、村とか町、あるいは地方や国とかもっと広い範囲の共同生活のいずれかの領域を指すのに用いようと思う<sup>1</sup>」と述べている。マッキーヴァーはコミュニティの構成要素として「地域性」と「地域社会感情」を挙げており、「地域社会感情」はわれわれ感情、役割感

情、依存感情に分かれている。これにおいてマッキーヴァーはコミュニティにおいて「地域性」を重要な要素と位置付けている。

さらに、奥田はマッキーヴァーの自身の著書『コミュニティ (Community—A Sociological Study)』において初版から晩年の版にかけてコミュニティの定義に変化が見られると指摘している。マッキーヴァーのコミュニティの定義は、初めは広く国家を含めた領域や制度的枠組みを問題としていたのに対し後年には人々の心や一体感情をコミュニティの中心に据えるに至っており、コミュニティの概念は社会の変化や論者の捉え方によって変化しうるものであると捉えている<sup>2</sup>。

表 1 マッキーヴァーによる「地域社会感情」の要素

われわれ感情	We-feeling	地域生活にともに参加している意識
役割感情	Role-feeling	コミュニティにおける自己の果たすべき役割意識
依存感情	Dependency-feeling	コミュニティへの物的、心理的依存意識

また、社会学者のヒラリー<sup>2</sup>はコミュニティについて 94 の定義を示し、そのうちの 69 がコミュニティ生活に一般的に見出されるものとして社会的相互作用 (social interaction)、領域 (aria)、共通の絆 (common ties) を挙げている。さらに「もしある地域性集団が、それ自体で共通の絆を供給できると想定するなら、全員がまた、コミュニティは少なくとも、人々が社会相互作用的に関わり、一つ以上の共通の絆や結びつきをもつ、一定領域である、と言うことに同意するであろう<sup>3</sup>」と述べていることから、マッキーヴァーと同じく「地域性」をコミュニティの要素としている。また、「共通の絆」と「社会的相互作用」はマッキーヴァーにおける「地域社会感情」と同等の意味を持っている。

都市社会学の分野では、地域における新たな

共同の座標軸として、奥田や鈴木によって、これまでにコミュニティのモデル化が試みられてきた。

奥田<sup>3</sup>による「コミュニティ」モデルにおいて、「コミュニティ」は図1に示すように、地域性と普遍性を伴うものと位置づけられ、「コミュニティ」の地域の住民は選択意志をもって居住し、住民の要求も地域全体の財に成り得たかが問われるような社会の考え方のモデルとして述べられている。

地域性 (+)	A: 「地域共同体」 この土地にはこの土地なりの生活やしきたりがある以上、できるだけこれに従って人々の和を大切にしたい。
普遍性 (+)	B: 「伝統型アノミー」 この土地にたまたま生活しているが、さして愛着や関心というものは無い。地元の人たちが地域を良くしてくれるだろう。
地域性 (-)	C: 「個我」 この土地に生活上の反応になった以上、自分の生活上の不満や要求をできるだけ市政その他に反映していくのは、市民としての権利である。
	D: 「コミュニティ」 地域社会は自分の生活上の拠り所であるから、住民がお互いにすんで協力し、住みやすくするよう心掛ける。

図1 コミュニティ・モデルの構成<sup>註4</sup>

鈴木<sup>4</sup>はコミュニティの構成要素として、土着性と移動性、豊富と貧困、生活構造と社会的統合における結束と溶解を挙げている。またコミュニティ・モラルを提言し、これを「『望ましいコミュニティ状態を維持し、創出しようとする態度』を軸にして把握された『コミュニティ意識の大きさ』を表す<sup>註5</sup>」としている。コミュニティ・モラルは、コミュニティ・ノルムと表現された当為意識・規範意識と共に「コミュニティ意識」を構成するものとされており、地域のコミュニティ意識についての分析に用いられた。今後の地域におけるコミュニティ形成要素への展開について、コミュニティ意識の分析より土地への定着性が重要視されている。

奥田による「地域共同体」、「個我」にやや対応して、広井<sup>5</sup>は農村型コミュニティと都市型コミュニティと表している。「農村型コミュニティ」は共同体に吸収される個人として非言語的な繋がりを感じるをベースに、一定の「同質性」を前提として強く結びついている関係性であり、「都市型コミュニティ」は独立した個人同士による共通の規範やルールに基づいた言語的な繋がりであり、個人の一定の「異質性」を前提とした関係性である。また、コミュニティそのものの概念を「重層社会における中間的な集団」と位置づけ、内と外との関係を緩やかに繋ぎ、外部に対して開いたものとしている。

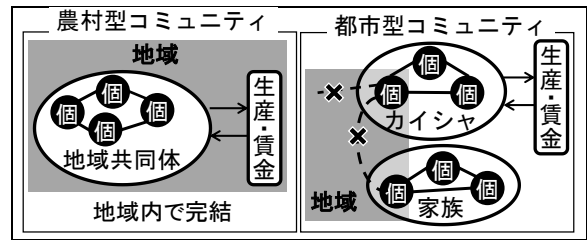


図2 農村型・都市型コミュニティのモデル図

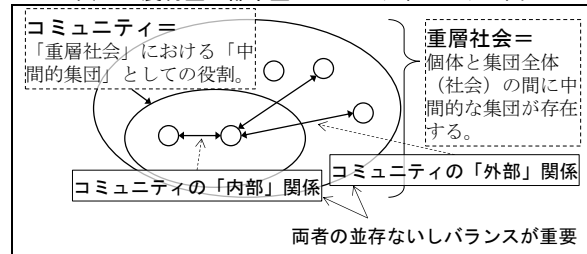


図3 コミュニティをめぐる構造<sup>註6</sup>

ジェイコブス<sup>6</sup>はコミュニティの社会的安定の要因として定住者と一時的な居住者との融合を挙げており、定住者の継続性の提供に対し、新参者はクリエイティブな融合を生み出す多様性と相互作用を提供すると述べている<sup>註7</sup>。

### 1.2.2. 本研究におけるコミュニティの定義

現代都市における社会構造は複層化しており、奥田も述べるようにコミュニティ・モデルとして一概に語ることはできない。本研究ではコミュニティを広井による「人間がそれに対して何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助(支え合い)の意識が働いているような集団<sup>註8</sup>」という定義を基に、本研究で対象とする地域組織の運営の観点から、非日常的な地域組織への参加が、日常生活での近隣交流へ展開されていくことが理想であると考えられる。

### 1.3. 既往研究と本研究の位置づけ

地域祭礼による新住民の地域への溶け込みに関する研究としては、神野ら<sup>7</sup>が神社の祭礼の運営手法の違いから新住民が認知しやすい組織構成を考察しており、町会と氏子組織を織り交ぜた運営が、地域住民の自主的な組織運営になると述べ、マンション住民への祭礼の認知を高めていることを明らかにしている。また、祭礼の地域生活への展開に関する研究としては、前村ら<sup>8</sup>により住民が祭りへ積極的に参加することがその後の地域活動への参加に繋がっていることを明らかにしている。

祭礼運営が地域コミュニティ形成へ与える影響に関する研究としては、根岸ら<sup>9</sup>が、地域の祭事の運営における他世代・町外者の参加

が次世代育成、広域的な地域運営体制の形成を促していることを示し、町間の連携も祭事運営組織が可能にしていることを明らかにした。また、木田ら<sup>10</sup>が、商店街組織が地域祭礼を復活させ運営する中で、個人的な繋がりから運営主体の繋がりが構築されることを明らかにした。

祭礼への参加や運営と地域の空間認知の関わりに関する研究としては、赤澤ら<sup>11</sup>による地域の空間構造と生活活動圏域からみた空間認知の関係に関する研究の中で述べられており、非日常生活としての地域祭礼が、日常生活での挨拶圏の広がりにも影響を与えていることを明らかにした。

これまでの研究では、祭礼組織の運営と参加と地域活動圏との関連性について触れているものの、複合的に述べているものは少ないことがわかる。本研究は、雑司ヶ谷鬼子母神の御会式に参加する17講社を対象に運営実態の考察と、組織幹部を中心とした参加者の生活行動への展開を考察することとする。

#### 1.4. 御会式の概要

##### 1.4.1. 日蓮宗における御会式

御会式とは、「御報恩会式」の略称であり、日蓮聖人の忌日に行われる法会の儀式である。本来は宗派に関わらず、祖師の命日を悼んだ法要が現在でも各寺院で行われているが、祖師信仰の強い日蓮宗において特に盛大に御会式が執り行われたことから、一般に御会式が日蓮宗の行事として捉えられている<sup>9</sup>。

御会式には、宗祖報恩の法要、法要の中で行われる御更衣の儀式、信徒による万燈行列の三つの要素に区分することができる。宗祖報恩の法要と御更衣の儀式は日蓮宗の各寺院で行われており、各寺院に所属する僧らが行っている。万燈行列は、今日では「御会式」として一般に認識されているもので信徒が万燈を掲げ、纏を振りながら寺院に参詣する。

##### 1.4.2. 雑司ヶ谷鬼子母神における御会式の発展と位置づけ

雑司ヶ谷鬼子母神の御会式も、一般の御会式と同様に、日蓮聖人への報恩会として代々継承されてきたが、時代と共にその様相は変化を遂げてきた。江戸時代に催された御会式は、10月8～13日を式日としており、この間には多くの参詣人が訪れている。また法明寺では末寺事にからくり人形を並び日蓮聖人の業績につい

て宗徒に示したとされる<sup>10</sup>。

現在の雑司ヶ谷鬼子母神の御会式は、10月16～18日の3日間開催されており、それぞれの日程で運営主体が異なる。表2に各日程の運営主体とその他の組織の役割を示す。10月16、17日は地域住民が主体となって御会式を計画・実行している。16日は各講社による町内回りの万燈行列が行われ、講社毎に領域とする町内を回っている。町内回りは講社によっては行っていない講社もある。17日は御会式連合会が主体となって運営されており、御会式連合会に所属する21講社が参加している。18日の御会式は、法明寺による本来の宗教行事としての御会式であり、万燈行列には他地域から遠征に来る講社も多数参加するため、参加講社は約50講社にも及ぶ。一方で、行列沿道の観客も18日が最も集まり、池袋地区でも盛大な祭りとして捉えられている。

雑司ヶ谷の御会式に関するこれまでの研究は、1998～1999年に弓山ら<sup>16, 17</sup>によって雑司ヶ谷の御会式に関する報告書が作成されており、御会式の地域への溶け込みや参加者の意識調査から、雑司ヶ谷の御会式が宗教行事の位置づけではなく、地域の祭りとして住民たちの生活に根付いた行事であることが明らかになった。また、法明寺の住職も御会式に関して地域の宗徒によらない参加も広く受け入れており、地域組織との連携も積極的に取りながら御会式を執り行っている<sup>11</sup>。

御会式が宗徒以外の参加を広く受け入れる背景として、各地の御会式に参加する講社の多くは檀家の関係にある寺院の以外の周辺地域で開催される御会式にも遠征講社として参加することが要因の一つであると考えられる。檀家以外の多数の講社の参加を受け入れる中で、宗徒とそれ以外の参加者の区別が曖昧になっていったと推測される。

表2 御会式開催の運営主体

	16日	17日	18日
法明寺		祈祷等	◎運営主体
御会式連合会		◎運営主体	○サポート
警察・消防	道路警備	道路警備	道路警備
地元講社	◎運営主体	参加	参加
遠征講社			参加

#### 1.5. 用語の定義

本研究において、使用する御会式に関する組織や、組織内の役割などを示す語句の定義を表

3に示す。なお、1章中に表記される「御会式」は、日蓮宗の行事として使用している。

表 3 用語の定義

御会式	本来、祖師の法要、万燈行列等全てを含めて御会式を呼んでいるが、本稿では万燈行列に焦点をあてて、御会式と呼ぶこととする。	
御会式連合会	地元講社の役員から成り、地元講社を代表して御会式の運営を執り行っている。	
(地元)講社	雑司ヶ谷鬼子母神の御会式の万燈行列に参加する、地域住民が主体となって運営する組織。	
講社の役員	講元	講社の代表者を講元と呼ぶ。講によっては会長と呼ぶこともあり、本論中では講社により適宜使い分けているが、役職の意味は同じである。
	世話人(役)	講社運営の中心メンバーであり、講元の補佐役を担っている。

2. 対象地域と調査概要

2.1. 対象地域の概要

本研究の対象地域は、雑司ヶ谷鬼子母神の御会式に参加する地元講社の領域範囲とし、豊島区雑司が谷、南池袋、東池袋、高田、目白、西池袋の一部（上り屋敷町会）、文京区目白台の一部（旧文京区雑司ヶ谷地域）、大塚6丁目の一部を含んでいる。なお、本研究の3章以降で本研究の調査結果を示す上で、これらの地域を総称して「雑司ヶ谷<sup>註1,2)</sup>」と表記する。

2.2. 調査概要

本研究は文献にて日蓮宗における御会式の民衆への拡がりとし日蓮宗と鬼子母神信仰の関係性を整理することで御会式の地域での位置づけを明らかにし、ヒアリング調査より組織運営と参加者の生活行為への展開を考察する。表4は調査概要を示したものである。また、考察に当たっては豊島区による御会式の報告書を用いて調査内容の補足をしている。

表 4 調査概要

	運営実態調査	生活行為調査
対象	御会式連合会所属17講社 <sup>註1,3)</sup>	新住民2名/地域住民1名
方法	対面式ヒアリング	対面式ヒアリング
期間	2015/7/28~9/26	2015/8/2, 9/6, 10/11

3. 雑司ヶ谷鬼子母神の御会式の運営体制の概要

3.1.1. 御会式の運営体制

表5には、万燈行列に携わる人の関わりを示す。万燈行列の運営は法明寺と地元講社の代表で組織された御会式連合会が月2回の定例会<sup>註1,4)</sup>を開き、相互協力の基に成り立っている。9月の最終週には、当日の注意事項と万燈行列の順番を決定する全体会議を開く。全体会議には各講社の代表数名と御会式連合会の幹部、法

明寺、警察・消防が参加する。また各講社では御会式に向けて纏の練習や万燈の準備活動を行い、多世代に渡って活動が展開されている。

表 5 各組織の御会式への関わり

	法明寺	連合会	警察等	講社内		
				講の中心	講員	参加者
全体会議	○	○	○	○		
連合会	定例会	○	○	○		
	太鼓の練習	○	○		△	
各講社	万燈組立			○	△	
	花づくり			○	△	
	纏練習			○	○	○ (子ども)
	直会			○	○	△
	片づけ			○	△	

3.1.2. 講社の御会式への参加方法

講社を設立し、万燈行列に参加するためには、法明寺へ参加の旨を伝えることで、参加可能となる。また、御会式の注意事項等の情報共有と、行列内で問題や争い事が起きた時に円滑に解決するために、御会式連合会への加入を勧めている。講社の設立にあたり、法明寺では最低20人程度の講員がいないと講社の運営ができないと判断している。講社内に法明寺とその末寺にあたる寺院の檀家がいる場合、法明寺の間に立って交渉にあたっている場合も見受けられる。

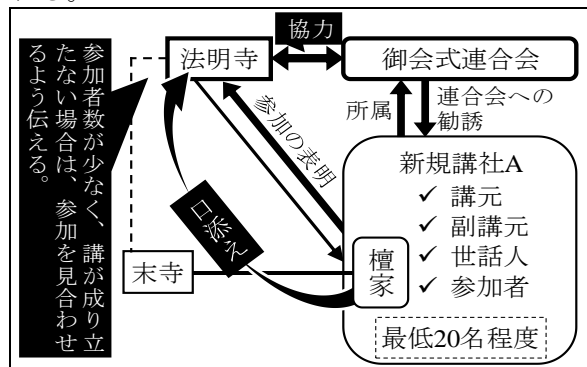


図 4 講社の御会式への参加方法

4. 参加講社の運営実態

4.1. 講社の地域への帰属性と領域性

講社の設立経緯を設立理由と現在は解散している講社との2つの観点から分類し表7に示す。講社は地域で御会式を楽しむという理由で設立されるものが最も多い。少数ではあるが、地域の居場所として設立された講社もあり、表6に示すように講社を拠り所にして御会式に参加している。このような講社では雑司ヶ谷内のさらに小さい範囲で領域を形成し、その範囲を地元と呼び帰属意識を感じていることがわ

かる。講社の中には、地元とは別に方向性の合う者同士で同好会として設立した講社もあり、雑司ヶ谷地域内でも様々な講社が存在している。

また、現在は解散している講社との関係からも、講社もつ帰属性と領域性が明らかとなっている。講社の復活や、講社がなくなってしまう

た範囲では講社を新たなメンバーで設立するというように、地域内の講社がなくなるとその近隣の講社がその領域を取り込んで活動するのではなく、新たな講社が生まれることで、地域として講社が継続されている。

表 6 講社の設立理由

地域の居場所	「子どもの居場所」 地元の女性陣から、御会式の際に子どもが夜どこに行っているかわからないので、御会式の会を作って欲しいという事で御会式にも参加するようになった。(講社 D ヒアリング・報告書)	「地域の人の居場所」 ホームサービス会が辞めるときにまだ御会式をやりたいと集まった人たちが会がなくなったら行く場所がなくなってしまうからという感じでこのメンバーが中心となって始めた。(講社 E)	この地域に講社が無い時は、自分の場合は友達がいる講社に叩きに行っていたが、友達が別の講社にいない場合はやりたくてもやるのが難しかったので、この町会の有志で講社をつくることになった。(講社 F)
地域で御会式を楽しむ	「御会式の無い地域で楽しめるように」 御会式の中心から一番外れている回なので、元々この地域に御会式を知っている人が少なく、御会式を拡げていこうと先輩たちが立ち上げた。(講社 J)	「より小さい範囲で御会式を楽しむ」 再開したのは無くなった講社の復活というより、よその地域でお客さんとして御会式をやるより自分たちでこの辺でも御会式を楽しめる場所があるといいねという感じで始めた。(中略) 宗教的な御会式じゃなくて純粋に御会式を楽しむ。(講社 K)	
同好会として	T 中学校の卒業生を中心に町会とは一切関係ない御会式の愛好家元は講社 N に参加していたが、小中学校の先輩後輩で方苗字の檀家が世話役となつた同級生 7 人で立ち上げた。本来なら生始めた。商店街でやっていると、御会式の見物客に対してスタートし、さらに野まれ育った地域の講社でやるべきだけして商業的なこともしたいという意見も出てくるが、人が増えて方向性の違いも見えてきたので講社を設立した。(講社 P)		U もっと純粋に御会式を楽しみたかったので、好きな人だけで楽しくやろうねと作った。(講社 Q)

表 7 講社の運営体系

設立理由	講社名	講員数(人)	参加人数(人)	前講社との関係			中心メンバー	運営体制				領域範囲			講社の位置づけ・役割				
				新規	復活	復興/派生		単一	準一	協力	認定	独立	単一町会	複数町会	特定範囲	領域無	交流/拠所	結束力	同窓会
戦前の設立	A	把握無	200~				町会役員	●					●			●			
	B	30	250				町会役員	●					●			●			
	C	把握無	100~				町会役員	●					●			●			
地域の居場所	D	200	200	●			町会役員			●						●			●
	E	200	200~			●	講演友人				●		●			●		●	
	F	把握無	100	●			町会役員		●				●			●		●	
地域で御会式を楽しむ	G	25	25			●	講演友人				●			●		●			
	H	170	200			●	地域住民			●			●			●			
	I	把握無	200		●		町会役員		●				●			●			
	J	100	100~	●			地域住民			●				●		●		●	
	K	80	200			●	地域住民			●				●		●			
	L	50	60	●			町会役員				▲			●					●
	M	把握無	120		●		町会役員		●					●		●		●	
同好会	N	70	120	●			地域住民			●				●		●		●	
	O	30	50			●	講演友人					●		●		●		●	
	P	40	50			●	地域住民					●		●		●		●	
	Q	120	200			●	地域住民			●				●		●		●	

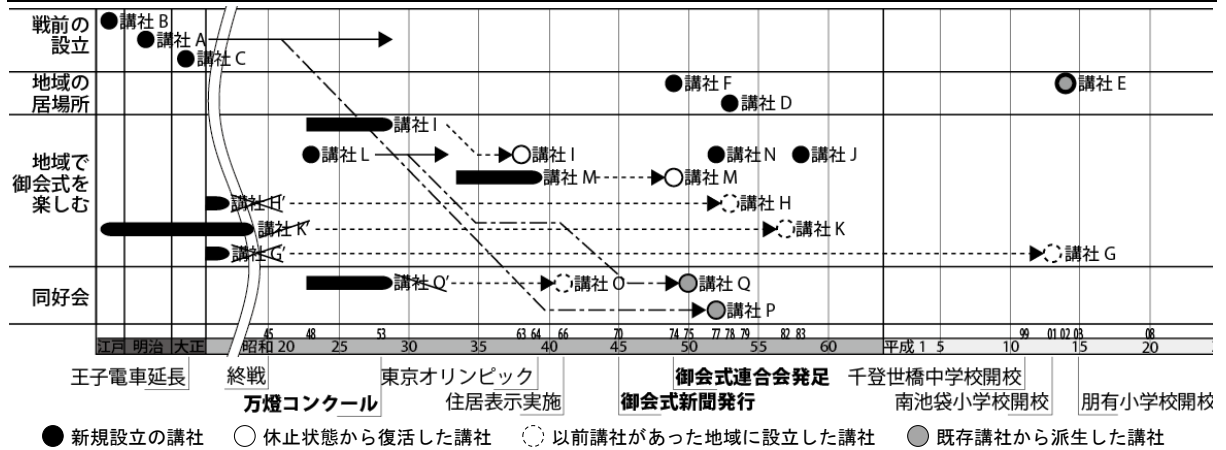


図 5 講社の設立年表<sup>15</sup>

#### 4.2. 町会組織との繋がり

講社の中心メンバーと町会との繋がりから段階的に分類した運営体制を整理し表 7 に示す。また、運営体制ごとの模式図を図 6 に示す。

多くの講社では中心メンバーは町会役員や地域住民によって構成されている。また、会社勤めの多い若い世代や子どもの小さい 30 代～40 代前半の世代が不足しており、時間の融通の利く商店街の店主や地域活動に積極的な町会役員が組織を重複して携わっているという現状である。

町会一体型は講社が町会の青年部等に位置付けられていることが多い。町会一体型の講社では町会本部や神社の祭礼の役員と講社の役員がほぼ同じメンバーで構成されている。しかし、資金面は町会と講社は独立して管理されている。また、参加者は、町会本部や神社の祭礼の場合、町会の領域内の住民しか参加できないが、御会式の場合は町会内組織の一つではあるものの、地域外からの参加も受け入れており、比較的柔軟に対応している。

町会準一体型は一体型と同様に、講社の中心メンバーと町会役員が重複しており、町会組織として参加する神社の祭礼でも活動しているが、御会式が本来は宗教行事であることから正式には町会と講社はそれぞれ独立した組織としている。しかし、講社の活動では既に町会組織として構築されている地域のネットワークを利用し、運営を円滑に進めている。

また、歴史の古い講社は町会一体型の運営をしており、古くから地域で活動していることで、御会式が宗教活動ではなく地域活動の一環として定着しているためであると考えられる。

町会協力型の場合や町会認定型の場合は町会として御会式の運営に関与することは無いが、可能な範囲での協力や奉納をすることで地域の組織として受け入れている。また、町会からの協力に対し、講社も神社の祭礼のお手伝いをする等地域貢献を意識して活動している。

いずれの場合も、講社と町会は互いに協力しながら運営しており、講社が地域を基盤とした組織であることが伺える。また、中心メンバーに町会役員と重複して参加する者がいることから、御会式について詳しくない地域住民からは町会の活動の一環として捉えられてしまい、

奉納が集まらないという課題もあり、地域住民による御会式の正しい理解は講社の運営に必要不可欠である。

町会独立型の場合は、町会から独立して運営しているが、地域住民が中心となって活動している。中心メンバーの中には町会役員を担うものがあるものの少数であり、町会活動と御会式を区別して考えている。また同好会的設立の講社は、町会独立型や町会認定型の運営でありい町会との関わりには消極的である。しかし、町会独立型の講社には、町会との関係を持たないことで活動場所が限られてしまうことや地域住民の理解が得られないことによる参加者の減少が見受けられ、十分な運営体制をとることができず運営に支障をきたしている講社もある。講社 L はこの現状を受けて、今後町会との協力体制を築いていく方向性に転換する姿勢を見せており、時代背景に併せて、運営を適応させる姿勢が読み取れる。

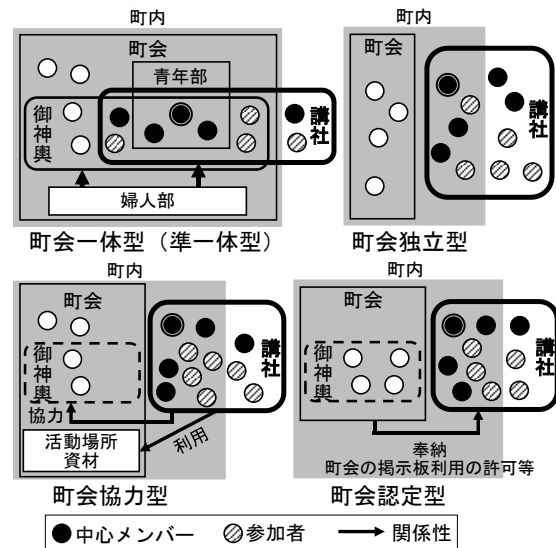


図 6 講社の運営体制の模式図

#### 4.3. 参加者の繋がりと講社規模

行列への参加経緯を分類し講社規模との関係を表 8 に示す。また講社規模は万燈行列への参加人数によって段階的に表している。表 7 に示すように、各講社は講員と毎年決まった講社に参加する固定参加者に加え参加講社が固定されていない参加者によって構成されている。講員と固定参加者は運営者によって把握されているが、御会式当日にはその他の把握されない大勢の参加者がみられる。講社への参加基準は講社によって異なり、当日の参加者が多く把握講員数と行列参加者数に大きな差がある

講社や講員と確実な繋がりをもつ者以外の参加を認めていない講社がある。本節における講社規模は講員ではない参加者も含めた万燈行列全体の人数を基準に分類する。

御会式への参加は地域の繋がりによる参加と友人同士の誘いによる参加が多い。また、御会式前にお仮屋と呼ばれる万燈の格納庫が地域内の通り沿いに設置されることで、新住民などが御会式を知るきっかけになり、自主的に講社へ参加したいと申し出る者が例年いるようである。さらに昨年度より御会式連合会で発行している御会式新聞にて連絡先や各講社の拠点の位置を掲載するようになり、それを見て問い合わせが来ると住所を聞き地元講社を紹介している。

講社の規模との関係からみると、参加者が地域の繋がりによる場合、講社規模も大きくなる傾向にある。地域繋がりの場合、多世代に渡る地域住民の参加によって多様な繋がりが可能となり、参加者増加に繋がっていると考えられる。一方で参加者が友達の繋がりによる場合、参加者層には偏りがみられ、講社の規模は小さい傾向にある。しかし、講社として参加者全員を把握することができ、講社のまとまりが生まれている。

表 8 参加経緯と講社規模

参加人数	地域	子ども	自主的	友達
151~	A B H I K	A H	I E K	E
51~150	J C F N	F Q	M Q	M N Q
~50				G O L

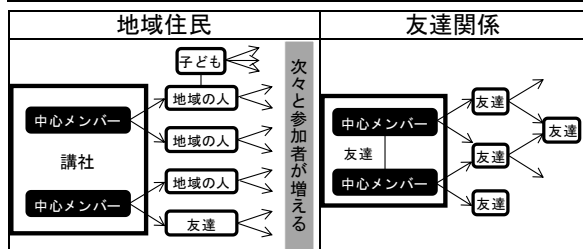


図 7 参加の繋がりによる講社の広がり

#### 4.4. 参加者属性からみた講社のタイプ

図 8 の地図中に示す講社のタイプは講員と固定的参加者の属性から分類した。鬼子母神を中心として新旧の住民が混在した講社を形成していることがわかる。これらの講社の運営は町会一体型や町会準一体型が多数を占めている。町会と密接な関係にある講社では、祭りのための同好会組織ではなく、地域の一員として町内の祭りに参加する程度の心構えで参加できることが新住民にとっての参加しやすさに

繋がるのではないかと考えられる。また、地域住民が集まる講社という感覚は新住民が地域に溶け込むために参加講社を選択する要因になりえる。

御会式の講社領域となる雑司ヶ谷地域には4校の小学校区が存在するが、講社 F や講社 I は講社領域が小学校区の概ね全域を包括していることから、各小学校に参加する生徒が各講社にまとまって参加している。小学校の繋がりを通して新住民や小学生の保護者、古くから講社に参加する地域住民が多世代に渡って参加する講社となっている。

また、集まる子どもの年齢が講社によって傾向があり、地域の幼稚園やスポーツクラブ等の仲間がまとまって参加していることも多い。こういった親と子の参加は講社の領域にはよらない参加も多く見られる。

同好会的な講社では同好会ではあるものの講社の領域から来る地域住民と地縁による参加者で構成され小規模で活動している。こういった講社では昔から参加している人にとっての居場所となり、地域を離れた後でも拠り所となっている。

#### 4.5. 講社の領域範囲

各講社が形成する領域の範囲を表 9 に示し、地図上の位置を図 8 に示す。雑司ヶ谷の講社は鬼子母神を中心として単一町会で構成される小規模領域の講社を形成し、鬼子母神から遠距離の地域や幹線道路等で空間が分断されている地域になると御会式の認知度は低くなり、複数町会を含んだ領域を形成している。複数町会や特定範囲を領域とする講社は単一町会からなる講社よりやや遅れて設立されている傾向にある。また、西池袋の紅嶺と東池袋の東池母神会はそれぞれ単一町会と複数町会を範囲としているが、実質的には特定の範囲で密接な活動が展開されている。

商店街周辺の講社は店舗を介して参加者が増え、講社の広がりを見せるため、領域が曖昧である。

表 9 講社の領域範囲

設立時期	狭域		広域	
	単一町会	特定範囲	複数町会	領域無
戦前	A B C			
万燈コンテスト期			N	
東京オリンピック期	I			O
御会式連合会発足期	D F P Q	M	H N	
昭和後期		J	K	
平成以降		G		E



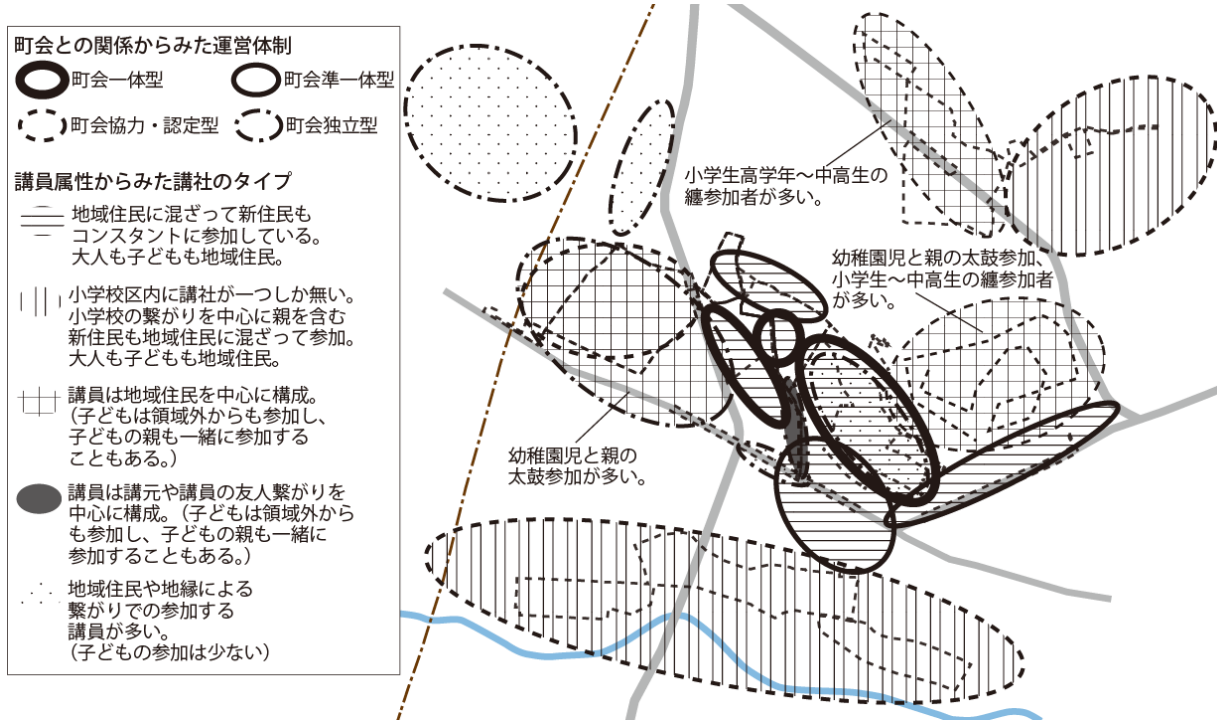


図 8 講社の領域図

#### 4.6. 講社の地域での位置づけ

運営者による、講社の地域での位置づけと役割を表 7 に示す。講社とその活動は地域において交流の場であると位置づけられている<sup>註16</sup>。御会式の特徴として、太鼓を叩けば参加できるという点から子どもから大人までが一同に参加できることが挙げられる。また、万燈行列だけでなく準備の活動で多世代がそれぞれ自分に合った参加の仕方があることも多世代交流が可能である大きな要因であるといえる。纏の練習では年長者が子どもに教える機会があることで子どもと大人がお互いに顔を知るきっかけとなる。花づくり等の準備活動は地域の女性を中心に皆で集まって作業することで普段の挨拶や世間話・情報交換等の交流を補完している。講社の活動を通して交流をもつことで、普段の生活でも地域として子どもを見守る意識が生まれ、自分の子どもを地域の中で安心して生活させること繋がっているという実感する者も多い。子どもにとっても自分の顔を知って声をかけてくれる大人がいることが行動範囲の選択に繋がっていることも今回の調査で明らかとなった。また、纏の練習は子ども同士の学年を超えた交流が可能となり、下級生の面倒を見たり上級生と接する中で礼儀を覚えたり上手くできて認めてもらえた時の成功体験を得るといった社会勉強の場としても機能し

ている。こういった地域住民同士の交流が講社の活動への参加を通してお互いが顔見知りで相互協力のできる基盤が作られ、地域の結束力が強めていると捉えている講社もある。

御会式を同窓会と位置付ける講社も多く、雑司ヶ谷出身者にとって一年の中で正月や盆と同様に地元へ帰省する年中行事として捉えられている。このことから、御会式が現雑司ヶ谷住民のみならず、他地域の居住者も地域に結び付ける役割を担っているといえる。

表 10 地域での御会式の位置づけ・役割

交流の場	<p>「地域交流の場として」 御会式をやるようになって全然知らない人と仲良くなって繋がりができたし、その繋がりが他の所で活かせるようになった (講社 B)</p> <p>人とコミュニケーションをとるきっかけになった。(講社 G)</p>
	<p>町内の人と関わっていない人とか商売をやる人は地域との密着度が高くなると思う。(講社 O)</p>
	<p>「多世代交流の場として」 御会式は小さい子どもからお年寄りまで幅広く参加していて、そういう行事はなかなかないので交流の場として地域に貢献できていると思う。(講社 A)</p> <p>御会式に参加することで近所の人や子どもたちの顔がわかるようになる。(講社 J)</p> <p>毎年来てくれる子は、御会式の中で教えたりといったことで接点があるので、普段も話しやすい。(講社 N)</p> <p>子どもの頃は地域の大人と接する場所は御会式しかないんじゃないかと思う。例えば商店街の Y くんも世代が違うので御会式がなかったら知り合っていないと思う。(講社 P)</p>
	<p>「社会勉強の場」 子どもたちにとっては上下関係も学べるし、友達も増えて社会勉強の場になっていると思う。(講社 B)</p>



地域の結束力が強まる場	「地域のまとめり」 もし御会式がなかったら町会はばらばらだと思う。(中略) 否定的な人もいるが、御会式が終わると毎年達成感みたいなものを感じて結果良しとなったりする。(講社 B)
	普段ばらばらの人が御会式を通して一つにまとまることができる。(中略) こういった活動が日常的な顔馴染みになることに繋がり、日常生活が潤滑に進むと思う。(講社 N)
同窓会	「災害時の助け合い」 文京区と豊島区で区が違うのに御会式を通して一つになれる。こういう繋がりには災害に時にも区を超えて助け合うのに役立つのではないかと感じる。(講社 M)
	地元を離れた人も御会式のために帰ってくる人が多く、そういう人たちとの再開の場であることも御会式の楽しみの一つ。お盆みたいな感じ。(講社 E)
	お嫁に行ってしまった子たちも帰って来て、行列の中に自分たちを見つけると声をかけてくれる。(講社 P)
	地元だから、ここに来れば会えるという感覚。(講社 Q)

5. 運営者の地域交流

講社の規模が 100 人以上の講社について、運営者の普段の地域での行動と交流をに示す。多数の参加者を有する講社では、運営者が地域に出て通りでの近隣交流を意識している傾向にある。講社に参加している子どもに地域内で会うと挨拶や声掛けを行い、夜間には早く家に帰るよう注意するようにすることで子どもを地域で見守ることを実践している。こうした運営者多くは自営業者であり自宅と地域内の店舗・事務所を一日に何度も往復しており、その際は近隣住民と積極的に挨拶や会話を交わし顔馴染みになっている。

また、地域内での行動の特徴として地域内の移動の多さと地域商店の意識的な利用が挙げられる。地域商店の利用を単に自宅からの距離が近いという理由ではなく、地域の活性化や地域交流といった観点から意識的に利用している。

表 11 地域での交流と行動

子どもとの交流	近所の通りの子どもはみんな知り合いの子もだから、自分のことを無視したら挨拶するように叱る。(講社 B)
	顔見知りになると声をかけるようにして、夜は「早く家に帰らなきゃだめだよ」とか声掛けしている。自分の娘に対して他のみんなも同じようにやってくれるので親からすると安心する。(講社 C)
地域での交流・行動	普段纏を教えている子に会うと挨拶する。(中略) なるべく大人から声をかけるようにすると自然に子どもから挨拶できるようになる。(講社 E)
	朝から事務所や倉庫前の掃き掃除をして、日中は地域内にある事務所や倉庫の間を自転車で行き来している。(講社 A)
	人付き合いや子どもを大切にしようとして、お店でコミュニケーションをとるように意識している。出前に行くので道端で人に会うと積極的に挨拶したり、長居はしないけど少し話すように心がけている。(講社 E)
	商店街は普段からよく使うように意識していて、お店に子どもにおつかいに行かせるとおつかいの品とは別におまけをもらってくる。(講社 J)

6. おわりに

雑司ヶ谷における御会式の講社は、広井により「人間がそれに対して何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助(支え合い)の意識が働いているような集団」と定義される、これからの都市型コミュニティを構築するきっかけとなっている。講社には多様な運営形態があり、町内会をベースとした地縁型組織だけでなく、ある一定のルールを基に組織を新たに立ち上げることができ、自由に参加することが可能である。一方で、御会式連合会によって万燈行列の一定のルールを周知し地域一体となって御会式を無事に開催する努力がされていることで安全性が確保され、さらに雑司ヶ谷の組織として地域に帰属意識を持つことが可能になるというコミュニティ構築の一つの装置として機能している。

また各講社では講員と固定的参加者の継続的に講社に参加するメンバーと当日のみの参加メンバーがいるが、継続的な参加メンバーは御会式に関する活動の中で多世代での地域の繋がりを持つことができ、地域で子どもたちの安全を守り育てるという意識を持つきっかけとなっている。子どもたちにとっても御会式が普段接する親や学校の教員以外の地域社会の大人から認められた存在とを感じる機会になっており、地縁型コミュニティの一員であるという意識を持ち生活することへ繋がっている。

ジェイコブスの指摘する一時的な居住者と定住者との融合の機会としても御会式が機能している。

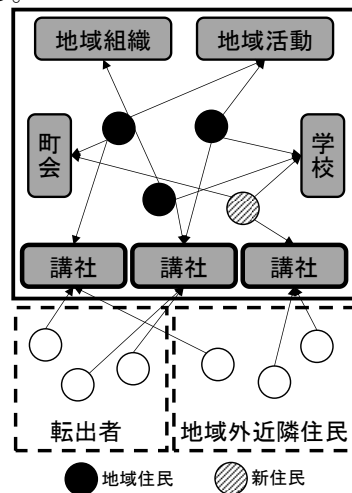


図 9 雑司ヶ谷のコミュニティの形成モデル

近年、地方都市等では、地域活性化の対策として出身者が U ターンしてくれることは勿論のこと、I ターンや観光を通して愛着を持ちファンとなってくれる人を増やすことで乗り切ろうとしている。雑司ヶ谷では御会式がそういった機会を創出している。かつての居住者が、毎年御会式になると地域に戻ってきて交流を深めたり、御会式を地域の魅力の一つとして居住を始める人もいる。都市部とはいえ、消滅自治体とも評されたことのある豊島区にとって、御会式が人口減少を食い止める重要な装置ともいえよう。

#### 【註釈】

- 註1) 参考文献 1, p46, L2  
 註2) 参考文献 3, p1, L7  
 註3) 参考文献 2, p314, L29  
 註4) 参考文献 3, p13, 図 3 を引用し、各モデルの解説は参考文献 4, p16, L24~p17, L1 に示される鈴木 of 解釈を引用した。  
 註5) 参考文献 4, p441, L9  
 註6) 参考文献 5, p25, 図 4 を引用  
 註7) 参考文献 6  
 註8) 参考文献 5, p11, L3  
 註9) 法明寺住職へのヒアリング (2013 年 7 月 23 日)  
 註10) 参考文献 15, p12, L7  
 註11) 法明寺住職へのヒアリング (2015 年 12 月 11 日)  
 註12) 豊島区都市マスタープランでは雑司ヶ谷地域は現在の雑司が谷・南池袋・東池袋の一部を総称している。  
 註13) 今回の調査では、御会式連合会に所属する 21 講社中 18 講社から調査協力が得られた。また、調査を行った南和会は万燈行列には鵬輦と合同で参加しており実質的には鵬輦が運営を行っていることから、考察においては除外し 17 講社の考察を行った。  
 註14) 本文中では月 2 回の定例会としたが、本来は連合会員による定例会と連合会役員による役員会が開かれている。  
 註15) 講社によっては、これまでに名称が変更されているものがあるが、組織の体制が変化していない場合については年表中では現在の講社名で設立年を示している。  
 註16) 一部の講社では、講社の位置づけとして交流の場と記されていないが、ヒアリング調査において質問者の聞き方によって回答が左右する恐れがあり、今回の調査で交流の場という回答が得られなかった講社でも交流の場となりえていたと判断した。

#### 【参考文献】

- 参1) R.M.マッキーヴァー：コミュニティ，ミネルヴァ書房，1975 年（中久郎・松本通晴訳）  
 参2) G.A.Hillery：Definitions of community, Rural Sociology, 1955 年（山口弘光訳：コミュニティの定義，鈴木広編：都市の社会学，誠心書房，1978 年）  
 参3) 奥田道大：都市型社会のコミュニティ（社会心理学選書 9），勁草書房，1997 年  
 参4) 鈴木広：コミュニティ・モラルと社会移動の研究，アカデミア出版会，1978 年  
 参5) 広井良典：コミュニティを問いなおす一つながり・都市・日本社会の未来，筑摩書房，2009 年  
 参6) ジェーン・ジェイコブス：アメリカ大都市の死と生，鹿島出版会，1977 年（黒川紀章訳）  
 参7) 神野夏子ほか：都市祭礼による地域コミュニティの再構築に関する研究—二つの巡行が重層する大阪市桃園・桃谷・金甌・東平連合を事例として—，日本建築学会近畿支部研究報告集，2008 年，p13-16  
 参8) 前村聡司ほか：岸和田だんじり祭りとは地域生活に関する研究—岸和田市大北町を対象として—，日本建築学会大会学術講演梗概集，2013 年，p545-546  
 参9) 岸根亮太ほか：祭事が地域運営に与える影響に関する研究—埼玉県秩父市における秩父夜祭を対象として—，日本建築学会計画系論文集第 622 号，2007 年，p129-136  
 参10) 木田恵理奈ほか：商店街振興組合による祭礼運営を通じた地域コミュニティ形成に関する研究—高松市丸亀商店街を事例として—，日本都市計画学会都市計画論文集 Vol.46 No.3, 2011 年，p481-486  
 参11) 赤澤宏樹ほか：住宅密集市街地における空間構造と空間認知の係わりに関する研究，ランドスケープ研究 61(5)，1998 年，p705-710  
 参12) 日蓮宗事典刊行委員会：日蓮宗事典，1995 年  
 参13) 田中富彌：仏教行事歳時記 10 月 十夜，第一法規出版，1989 年  
 参14) 宮崎英修：民衆宗教史叢書（第 9 卷）鬼子母神信仰，雄山閣出版，1985 年  
 参15) 文京区・日本女子大学：江戸時代に生まれた庶民信仰の空間—音羽と雑司ヶ谷—，日本女子大学，2010 年  
 参16) 弓山達也ほか：祭りのダイナミズム—雑司ヶ谷鬼子母神万灯練供養の研究，大正大学 1998 年度比較宗教論Ⅱ<祭りの意味と役割>報告書  
 参17) 弓山達也ほか：祭りの宗教性—雑司ヶ谷鬼子母神万灯練供養の研究 2，大正大学 1999-2000 年度Ⅰ類人間探究<現代人と宗教>報告書  
 参18) 豊島区教育委員会：豊島区文化財調査報告 8 雑司が谷鬼子母神御会式調査報告書，2014 年



